

薩摩藩御留流じげんりゅうひょうほう示現流兵法について

はじめに

日本の本土最南端に位置する鹿児島県は、人口 160 万人（*2020 年 1 月 1 日現在）、南北 600 キロで薩摩半島、大隅半島、そして南西諸島からなります。鹿児島県は、中世から近世にかけては島津氏の治める薩摩藩（*当時は沖縄から宮崎県南部までの南北 1,400 キロを領有）と呼ばれていました。

この薩摩藩の士風形成に大きな影響を与えたのが示現流（じげんりゅう）と呼ばれる薩摩独特の剣術でした。示現流は、島津家 18 代当主で初代薩摩藩主・島津家久（いえひさ）の時に誕生し、後に門外不出の薩摩藩独自の武道として受け継がれ今日に至っています。

特に家久公が慶長 9 年（1604）に鹿児島城（＝鶴丸城）を造営した時に、藩士が示現流兵法の稽古に都合が良いようにと、城の南側の土地（*現在、小松帯刀像の立つ鹿児島県文化センターの一角）を、示現流の創始者・東郷肥前守重位（とうごうひぜんのかみちゅうい）に与え、薩摩藩の剣術師範役として指名してからは、二代重方（しげまさ）、三代重利（しげとし）と、代々東郷家が一子相伝（いっしそうでん）の形でこの役をつとめてきました。江戸中期ごろまでの薩摩藩の剣術は、示現流のみであり薩摩藩の士風形成に大きく寄与したのです。

幕末、京都の街の警護に当たった新撰組の隊長・近藤勇が「薩摩の初太刀（しょたち）は必ずはずせ」と常に隊士に教えていたといえます。この初太刀こそ示現流の“蜻蛉（とんぼ）の構えからの打（うち）”であったのです。薩摩藩士は日頃から立木打（たてぎうち）で腕の力を鍛えており、いにしえより“朝（あした）に三千、夕（ゆうべ）に八千、立木を打て”と教えられたものです。

この春（2020 年 3 月末）武の国薩摩を象徴する鹿児島城（＝鶴丸城）御楼門が 147 年ぶりに復元されました。御楼門は島津家 18 代当主島津家久により慶長 6 年（1601）に建設が始まった鹿児島城のシンボルとして 1604 年に完成しました。

戦国の世が終わり、徳川将軍家を頂点とする武士の時代がスタートした時、これからの侍の時代にふさわしい薩摩武士を育てようということで薩摩藩では東郷重位が藩の剣術師範役として抜擢され、薩摩藩

お抱えの学者で当時の外交文書などをもしたためていた文之（ぶんし）和尚と呼ばれた城下大龍寺（だいらりゅうじ、現在の大龍小学校）の学僧・南浦文之（なんぽぶんし）和尚により、重位の修めていた剣術の流儀名が示現流と命名されました。

以後、示現流は薩摩武士の精神的支柱となり、江戸時代を通じて門外不出の薩摩藩の兵法として代々の薩摩藩主に重用され、四百年以上を経た今日まで創流当初そのままの姿で、現在第13代宗家東郷重賢（しげたか）とその門人たちによって、日本の誇る貴重な武の文化遺産として伝承されています。

示現流はその教えにある通り「刀は抜くべからざるものなり」と、無益な殺生を厳しく戒めるとともに、危急の際には無念無想に打つという極意と、いったん刀を抜いたら最初の一太刀に全てをかける「一の太刀を疑わず、二の太刀は負け」「刀は敵を破るものにして、自己の防具にあらず」「人に隠れて稽古に励む」という厳しさを伝えています。

一撃必殺という単なる戦技でなく文武両道の薩摩の武士の品格をも形作っていった薩摩藩御留流（おとめりゅう）示現流兵法（じげんりゅうひょうほう）が、御楼門と一緒に誕生したことを是非多くの人に知っていただきたいと思います。



復元された鹿児島城御楼門
(国内最大規模の武家門で、高さ・幅ともに約20メートル)



天保城下絵図（鹿児島市立美術館蔵）



天保城下絵図に描かれた示現流東郷家屋敷
(現在この地に博物館と道場を併設した示現流兵法所史料館が建つ)

■示現流誕生の歴史

- (1)天真正自顕流（てんしんしょうげんりゅう）から示現流へ
～善吉（ぜんきち）和尚と重位（ちゅうい）との出会い～



東郷重位肖像

示現流兵法を創始したのは薩摩藩の武士で工芸部門に卓越した技術を持っていた東郷肥前守重位（とうごうひぜんのかみちゅうい）と呼ばれた人物です。東郷重位は天正15年（1587）島津家16代当主島津義久（よしひき）公に従って京都に上りました。これは豊臣秀吉の命令を受け京都の聚楽第（じゅらくだい）普請工事に当たるためでした。重位を蒔絵、彫金の工芸家として京都の後藤家（ごとうけ）に入門させ、さらにその技術を高めてもらおうという藩主のねらいでした。

この半年余りの京都滞在中に東郷重位は、現在も京都の寺町にある曹洞宗（そうとうしゅう）の禅寺・万松山天寧寺（ばんしょうざんてんねいじ）に参禅し、曇吉（どんきち）禅師の教えを受けました。曇吉禅師は重位の身ごなしが常人と異なり、武道に秀でていることを察して自分の仏弟子（ぶつでし）・善吉（ぜんきち）和尚のことを話してきかせました。

「自分の寺に善吉という僧がいる。この僧は十瀬与三左衛門長宗（そせよそうぎえもんおさむね）という人が創始した天真正自顕流（てんしんしょうじげんりゅう）という剣法をおさめた達人である。善吉は、もとは武士で俗名を赤坂弥九郎雅楽助（あかさかやくろうたのすけ）といった。父親の仇を討つために天真正自顕流の二代目金子新九郎（かねこしんくろう）の弟子になり修行し、19歳の時に念願の仇を討つことができたが、人の命を奪った自責の念にかられ仏門に入り、私の弟子となった。この善吉の使う天真正自顕流という剣法は非常に優れた流儀であり、私が思うに剣法を習うにこの天真正自顕流に勝るものはない。一応どのようなものか見てみてはどうか」という内容でした。

重位はその当時薩摩藩で主流を占めていた剣術・待捨流（タイ捨流）の免許皆伝の腕前でしたので非常に喜んで、早速翌早朝、天寧寺に行きますと禅師が出迎え重位を本堂に案内し、庫裏（くり）の隙間から庭をのぞかせました。この時善吉は庭内を掃除していましたが、それが終わるや箒（ほうき）を斜めに構え「濁り江に映らぬ月の光かな」と口ずさみました。その姿は体勢りりしく鋭い眼光には一部の隙もありませんでした。重位はこれを見て思わず身震いし、これこそ本当の剣法だと深く感嘆し、禅師に頼んで善吉の教えを受けられるよう嘆願いたしました。そしてその夜、善吉と重位は知り合うことになりました。

重位は善吉に天真正自顕流の教えを受けたいと申し出ましたが「私は仏の弟子であります。どうして人を殺めるような剣法を知るものですか」と断られ、とりつくしまもありませんでした。一ヵ月たっても二ヵ月たっても結果は同じことでした。しかしながら重位は屈せず毎晩参禅に訪れては懇請を続けました。六十余日過ぎたある夜重位は一計を考え、いつものように玄関まで送りに出た善吉に、玄関に隠しておいた棍棒で打ちかかりました。善吉はすかさず手燭（てしょく）でこれを防ぎ「何をするか！」と一喝しました。その勢いの激しさといったら重位の五体が恐れおののき萎れてしまいどうすることもできないほどのものでした。

しかし、このことによってようやく善吉も重位の熱意に動かされ「貴殿の熱心なことには感心した。私もこれ以上断ることはできない。明日から毎晩いらっしゃい。ただご存じの通り貧僧であるので蠟燭（ろうそく）と木刀を用意してくるように」と申されたのでした。そして二人は初めて師弟の約束を交わしたのです。時に天正16年（1588）6月15日、師の善吉22歳、重位28歳でした。重位はこれから六ヵ月間毎晩修行し、師の善吉もすべての秘訣を授けました。

こうして天真正自顕流の神髓を習得していったこの年の暮れ天正 16 年 12 月 26 日の深夜、明日はいよいよ帰国するという重位に師の善吉は天真正自顕流の奥義を授けました。二人は互いに別れを惜しみ、重位が言外の情を詩に託し「稀にあふ峰に積もれる空の雪」と詠むと、善吉はこれに答えて「鳥ぞなくふところ清き雪の山」と詠んだのでした。善吉は曇吉禅師の後を継ぎ天寧寺第四代の住職となり閑翁（かんおう）と号しました。

天寧寺の門からは、比叡山がちょうど門が額縁のような形できれいに見えます。月明かりに照らされた比叡山の山頂を遠くに眺めながら二人は深夜稽古に励んだのです。天寧寺の門の前には、薩摩示現流の祖である善吉和尚のことが立札に書いてあります。

(2)薩摩の示現流兵法ができるまで

天正 16 年 12 月京都を発った重位は、翌天正 17 年 (1589) 正月、国分の鳥越の屋敷に帰ってきました。自宅に帰った重位は、善吉に授けられた秘訣を守り、一日も休まず研鑽を積みました。その方法は自宅における独りの修練で、立木または生木を相手に千日修行の言葉通り、三年の間昼間は人目を忍び、雨の日は蓑笠をつけてひたすら修行に励みました。

また木刀を握らないときは伝書をひもとき、自宅にある一抱えもある柿の木や梅の木、その他の木を打ち倒し業の妙用を得、独特の剣法を作ったのです。

(3)他流試合

天正、慶長年間はまだ戦国時代の名残で、とりわけ薩摩・大隅・日向の三州は武道が盛んで、その業に秀でた人が多くいました。その中でも重位の名声は高く、一流の剣客が立ち合いを求めてやってきました。その数は四十六回にも及んだのですが、どの人もかなわず、ほとんどが門弟になっています。

その主なものをあげますと、まず薩摩藩では、琉球征伐の副大将で当時の剣の名人・平田太郎左衛門や、木崎原（きざきばる）の戦いで有名な春日主左衛門（かすがしゅぎえもん）、藩の剣術指南役・東新之丞（ひがししんのじょう）等、その当時屈指の猛士もすべて敗れたのです。

また藩外では、將軍家の命を受け柳生新陰流の高弟であった福町七

郎衛門（ふくまちしちろうえもん）、寺田勝介（てらだかつすけ）の二人と元和（げんな）8年（1622）江戸で立ち合いをしましたが、いずれも重位に敗れ、神文（しんもん）を入れて門人となりましたが、福町は肋骨が折れて三日後に死亡しました。その時の神文が今も残されています。（*示現流兵法所史料館にて展示公開中）

（4）師範役の拜命

慶長9年（1604）2月、重位は初代薩摩藩主となった島津家18代当主・島津家久公の命により、当時の藩の剣術指南役・東新之丞との立ち合いを命ぜられました。新之丞はかつて重位が教えを受けたタイ捨流の奥義を修めた使い手で、家久公の剣の師匠でもありました。しかしながらこの立ち合いで、新之丞は木剣が両断され惨敗しました。

己の師匠の敗れたのを家久公は喜ばず、この後書院に重位を召され、特にお側近くに寄るように命じられ、とっさに隠し置いた木刀をとって打ち掛かられましたが、重位は電光石火の如くこれに応じて、所持していた一尺八分（32.5 cm）の扇を以て、家久公の右拳を押しえ付けました。このため右拳が腫れあがり、その痛みが激しく治療に数日かかったということですが、家久公は重位の剣法がすぐれていることを深く感じられ、親しく杯をとらせてお褒めになり、特に夫人にお酌をさせられ、師弟の約束を結ばれたのです。

そして重位に薩摩藩の剣術指南役を命じ、銘刀及び禄一千石、お城近くの上屋敷と城下の西別府に野屋敷を下され、さらに坊（ぼう・現在の南さつま市坊津町一帯）の地頭職を命ぜられたのです。

また家久公は、藩の御用絵師に重位の肖像画を描かせ、自ら和歌を書かれ、これを重位に賜ったのです。以来、東郷家では毎年の稽古始めの日にこの肖像を床に懸け、新酒を供えて礼拝いたしており、この儀式は四百年余を経た今日でも、示現流兵法所において毎年1月5日の稽古始めの儀、12月27日の稽古納めの儀、さらに誓詞式の際に続いております。

和歌の内容は次の通りです。

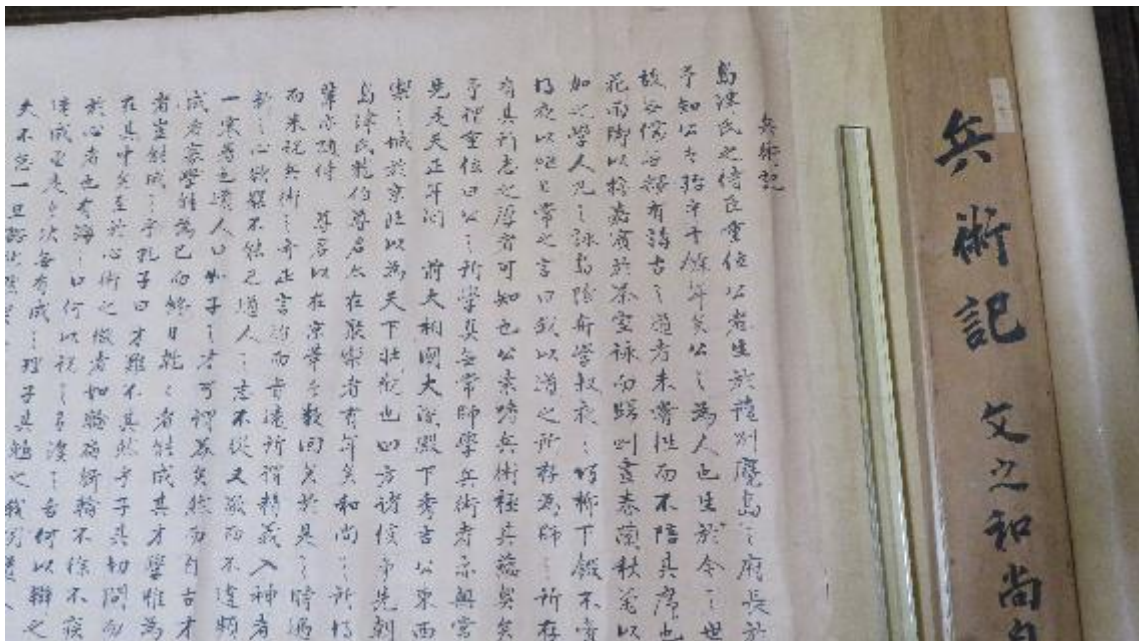
天地を吹わかつ風におく露の 色かへぬこそ吾すがたなる
（あめつちをふきわかつかぜにおくつゆの いろかえぬこそわがすがたなる）

(5) 示現流の名称

重位の編み出した剣法を示現流と命名したのは、当時の薩摩藩お抱えの学者で外交文書などをもしたためていた文之和尚と呼ばれた城下大龍寺の学僧・南浦文之（なんぼぶんし）です。文之和尚は碩学の長老で家久公の信頼が厚く、重位とも十年以上にわたって親交がありました。

文之和尚はある日重位に「法華経（ほけきょう）に示現神通力という言葉がある。示現とは神仏がその靈験（れいげん）をあらわす意味で広遠な言葉である。客気（かっき）盛んな若者は、ややもすると自顕の字義にとられて、血気に走りやすい恐れがあるから、これを示現に改めてはどうか」と申されました。

重位はもっともだと思いきや家久公に申し上げたところ、家久公も「文士和尚の言うことは道理である。今後、示現流兵法と称するがよかろう」ということで、改称して今日に至っております。その後、27代齊興（なりおき）公により門外不出の薩摩藩御留流として嘉永（かえい）元年（1848）7月9日に「御流儀示現流兵法（おりゅうぎじげんりゅうひょうほう）」と唱えなさいとの藩の命令がでております。



南浦文之筆「兵術記」

(示現流の成り立ちを今日に伝える文之和尚直筆の資料)

3. 示現流の業（わざ）と心

示現流の開祖・東郷重位は、多くの心法、技法の伝書を残しています。東郷重位は、永禄（えいろく）4年（1561）生まれで、寛永（かんえい）20年（1643）82歳で死亡しました。初め弥十郎（やじゅうろう）と号していましたが、藤兵衛（とうべえ）、長門守（ながとのかみ）、和泉守（いずみのかみ）、越前守（えちぜんのかみ）、肥前守（ひぜんのかみ）、隠居の後に自ら重位（ちゅうい）と号しました。

師の善吉が重位に与えた伝書は三巻で、その後『深秘心底抄（しんぴしんていしょう）』が授与されましたが、これは文字が少なく意地（理）が玄妙であり、一般的には理解しにくいものです。そこで重位は将来、心と業が誤解されるのを恐れて十三巻の伝書を残したのです。

代表的な伝書をあげますと、

『聞書（ききがき）』慶長9年（1604）作

『示現流兵法切紙（きりがみ）』元和7年（1621）作

『示現流秘伝書』元和7年（1621）作

『燕飛之次第（えんぴのしだい）』寛永元年（1624）作

『兵術察見（へいじゅつさっけん）』寛永16年（1639）作

『示現流兵法書 上・中・下巻』元和年間（1615～1623）作

その他『阿字観（あじかん）』『阿字察見（あじさっけん）』など三百点が現存しています。これらはすべて鹿児島県の有形文化財（*鹿児島県指定有形文化財東郷家古文書）に指定されており、いずれの文書も示現流の奥義を説いています。これらの伝書を体系化したのが『兵法書』です。

重位は、示現流の業と心のありようを、神道・仏教・儒教、特に仏教・儒教の比喻から要句を引用し、また自身が修業した結果の意地と味から説いています。和歌をたしなみ歌人でもあった重位は、これら神・仏・儒の語句の中から引用して示現流の極意を「いろは歌」に織り込んだりしています。

次に業について述べますと、

重位が善吉に習った型というのは、現在の初段から四段までの十二本だけで、残りの初度（しょど）の型と両度（りょうど）の型、及び槍留（やりどめ）の型は、重位が独自に編み出したものです。

初度の型には、燕飛（えんぴ）、小太刀（こだち）、再起（せき）、三ッ太刀（みったち）があり、燕飛は示現流の奥義十二の打ちを織り込んだ型で最初に習うものです。これを小さい時から繰り返し繰り返し練習することによって相手との間合い（間隔）や剣のスピードを体得していき

ます。

小太刀は、その名の通り脇差などの短い武器で戦う型、再起・三ッ太刀は、複数の敵を相手にする時を想定した型です。

両度の型は、ただ一打ちで相手を倒す業で、持掛（もちがかり）、早捨（はやしゃ）と、槍や薙刀などの長い武器と対する時を想定した長木刀（ながぼくとう）、振掛（ふりがかり）があります。

そしてこれらを修得した後に、示現流の神髓である段の打ちと呼ばれる十二本の業を更に修得していきます。

初段・左肱切断（さひせつだん）に、立（りゅう）・双（そう）・越（えつ）と呼ばれる三本が、

二段・横指横切（おうしおうせつ）に、寸（すん）・満（まん）・煎（せん）の三本、

三段・磯月（そげつ）に、平（へい）・安（あん）・行（こう）の三本

四段・雲耀（うんよう）に、軽（けい）・道（どう）・真（しん）の三本の打ちがあります。

江戸時代は、初度を初学、両度を学士、初段・二段の称号を賢（けん）、三段・四段を聖（せい）、相伝を君子（くんし）と呼びました。

示現流では、初度（入門）、両度、初段、二段、三段、四段と順次伝授するにあたり、その都度、起請文（きしょうもん）と呼ばれる誓詞（せいし）を入れ、血判を押し約束したもので、その内容は示現流の機微を学ぶにあたりお師匠家や子孫に至るまで裏切り行為や御家流の批判をしないこと、流儀の内容を他見、他言しないということを神仏に誓って約束するという内容となっています。この起請文の制度は四百年余が経った現在でも正式の入門にあたっては続いています。

4. 示現流の意地と味

示現流を教えるにあたって普段重位がどのようにして教えていたかを示すエピソードが今日に伝えられています。「示現流とはどんなものか」と聞かれたときに、東郷与助が「春駒が己の氣を得て幾尋とも知れぬ崖の上に片足を踏みかけ、大空に向かっていななく姿である」と答えたところ、重位は「いやいや普通に草をはんでいる姿・すなわち自然の姿だ」と言ったといひます。

また、重位はある夜、野犬がうるさい爲に、当時20歳だった息子の重方（しげまさ）と門弟の薬丸兼陳（やくまるけんちん）に、あの犬をどう

にかして来いと命じました。二人は犬を殺して帰ってきて「自分は犬を討ったが地面に打ち込まず、また刀の刃も折れていないのは自分が上手だからだ」と自慢げに話していたところ、「そんなことでどうするのか」と、重位は自分の刀で目の前にあった厚さ八寸（24 cm）の碁盤から畳、そして根太まで切り裂いて「三千世界の地の底までも切り割るような気持ちで斬れ」と叱りつけたということです。このように若い者には意地を、年輩者には味をというふうに教えました。

また、一番大切にしているのは、次の和歌にあるように、心の修業を大切にしたということです。

けいことて 外に求める 道もなし 心の塵を はらうばかりぞ

二の太刀の ありと思うな 一討ちに 敵をいためよ 当流のあじ

待ちもすな かかるころもさだむなよ 味は敵よりいずるものなり

示現流の伝書は、神・仏・儒の三道からヒントを得て、流祖重位が譬喩の語句を考案し、修行段階の異なる弟子に譬喩の語句を説明し、奥義を説いたものです。

たとえば「深夜帯（しんやのおび）のこと」という譬喩は、いつも人は着物の帯を結ぶことに慣れているので、暗闇の中でも、よそ見をしながらでも結ぶことができるのです。これと同様に太刀をいつも打っておれば、いついかなる時でも太刀の速さは変わらないということです。

重位は仏教のうち、特に真言密教について造詣が深く「阿字観（あじかん）」の中に重位が如何に観想したかについて、大和（奈良）の長谷寺の小池法印が書いているほどです。

示現流が薩摩に来てから今年で四百三十一年、薩摩藩独自の剣術流儀・示現流兵法として正式に命名されてから四百十六目になります。そして今年は示現流の命名者・南浦文之和尚の没後四百年に当たります。

流祖東郷重位の時から少しもその形を変えず、起請文の中に「向敵極死打申儀毛頭疑無落着致候事」（敵に向かい死を極め打ち申す儀、毛頭疑い無く落着致し候事）とあるように死ぬ覚悟でもって敵に向かうのが示現流です。



拝領屋敷跡に建つ示現流兵法所史料館（鹿児島市東千石町2-2）

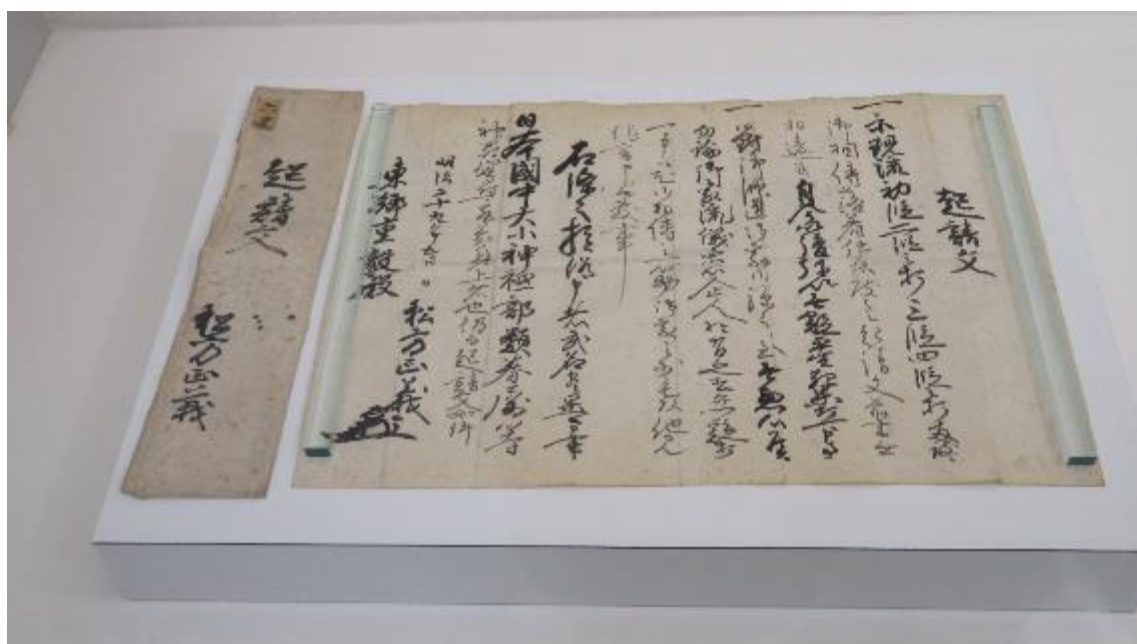


示現流兵法所（土が敷きつめられた道場内部、手前は立木）

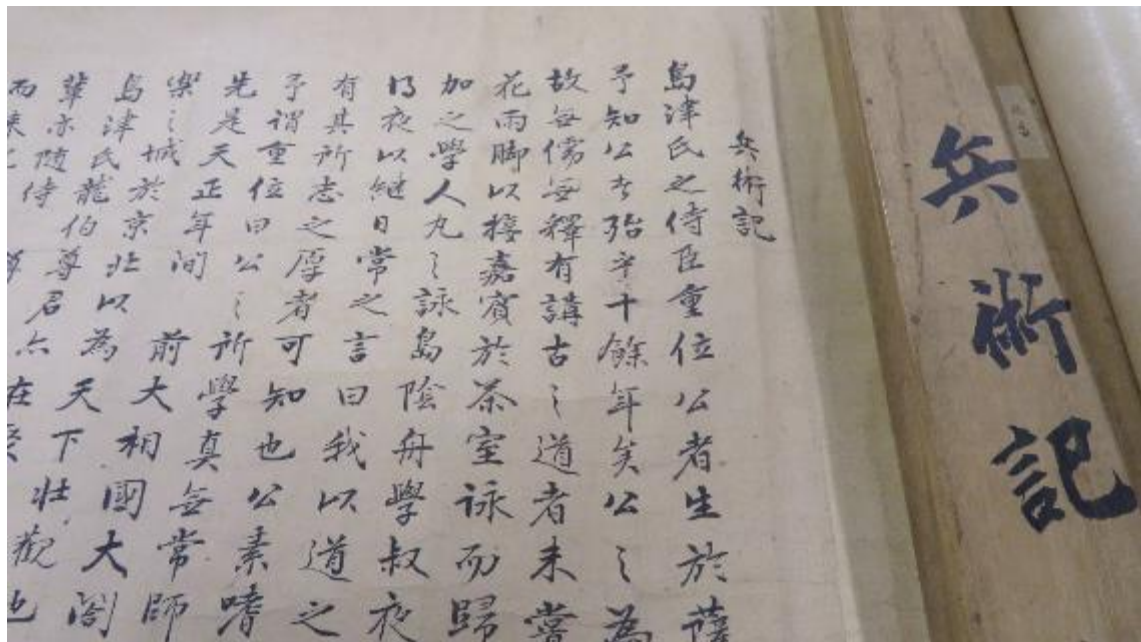
示現流史料館の展示内容より



示現流史料館内観



幕末～明治の門人・松方正義公の起請文



示現流の命名者南浦文之和尚直筆の兵術記



流祖重位公作の鍔

「刀は抜くべからざるものなり」の教え通り鞘止の穴が穿かれている